

シリーズ 私の一冊の本

薬学部 藤井敏 先生

モーリス:ウィルキンス 著 長野敬/丸山敬 訳 『二重らせん 第三の男』

閲覧室 1 階 289.3/W 73

岩波書店 出版

「二重らせんの発見」にまつわる論議の最後の証言誌である。DNA 二重らせんではワトソン (J. D. Watson) とクリック (F. H. C. Crick) が有名で、ノーベル賞受賞者でもある著者ウィルキンス (M. H. F. Wilkins) の影が薄い。それどころか女性科学者フランクリン (Rosalind Franklin) との確執で暗い面が強調されてきた感がある。ワトソンは著述でも大きなうねりを起こしたことで知られている。ノーベル賞への彼の成功への道のりを、息もつかせぬ緊張感と、赤裸々な苦闘・疑問そして勝利感を表現した「二重らせん」は歴史に残る科学史書であろう。この本はそれ以上に、彼のおそらく異常なまでの率直さからくる同僚科学者への容赦ない著述、とりわけフランクリンへのそれは彼女の貢献を過少評価する意図もあって揶揄した表現となっており、ある意味では人間臭さのあふれる科学裏面史である。フランクリンの撮影した B 型 DNA の X 線写真を彼女の了解なしでワトソン・クリックに見せたことで、ウィルキンスは女性差別者のレッテルが貼られることになった。ワトソンの「二重らせん」に誘発される形でクリックらもいくつかの科学著書を残しており、フランクリンについても「ダークレディと呼ばれて(二重らせん発見とロザリンド・フランクリンの真実)」が最近刊行された。残されたウィルキンスが死の前年 (2003 年) に 50 年の沈黙を破って、彼の科学者としての信念生き様を語った遺作である。

ウィルキンスとフランクリンはほぼ同年代で、共に科学者の一家には生まれてはおらず、それなりに理解ある家族の援助のもと、科学者への道を非エリート的に歩めた。戦争への科学的寄与を模索し、大学での科学的社会主義活動にも濃淡があるが積極的に対応してきた。戦後フランクリンはフランス学風に感化され、また X 線回折での石炭の構造で著名者となっていった。ウィルキンスは、大ボスであるランダル教授のキングスカレッジでの生物物理部門創設の一翼を、右腕として生物試料 DNA の X 線回折法で明らかするチームの主任として抜擢された。まもなくフランクリンが回折装置の改良を担うべくこのチームに参画した。ウィルキンスは DNA の構造解析に終始真摯に興味を維持しており、解明のための理論的布石にも着手していた。フランクリンは頑なまでの秘密主義のなか X 線回折データを溜め込む。ウィルキンスの女性への度重なるアプローチ(旅行)癖とフランクリンの引きこもりで、二人の接点はほとんどなくなった。ワトソン・クリックの大失敗によってもたされた「DNA モラトリアム」期間も、ランダル教授の場当たりの二人の分離とフランクリンへの賢人バナール教授の引き抜き工作で有効には生かされなかった。更に、フランクリンがワトソン・クリックのモデルの間違いに意気揚々となり、「B 型 DNA はらせんでない」とまで言い切る姿勢の是正が遅かった。

ワトソン流(アメリカ風)のノーベル賞狩りに、この二人の実験科学者が翻弄されつづける場面、ロンドン一派とケンブリッジ学派との覇権争い、名誉著者の申し出などには現在の科学者の置かれている状況の一面も垣間見え面白い。偉人たちの伝記としてではなく、戦後まもなく英国で繰り広げられ開花した生物と物理の融合劇に情熱を傾けた等身大像の人間臭い narrative(物語)である。